

問十 本文の内容に合致するものを選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 江戸時代の文人たちが反俗を生活の態度として通そうとしたように、近代の文学者もまた、表現から通俗を完全に排除することが可能であると考えていた
- ② 近代の純文学において、文章の推敲が主に通俗的な表現を排除するために行われてきたことは、作家の個性や創造性を損ない、文学作品の多様性を失わせる原因となった
- ③ 日本の近代文学において通俗が嫌悪されてきたのは、《聖》の追求や社会体制の否定といった精神によるといよりは、生理的な嫌悪や近親嫌悪に近いものによる
- ④ 現代の日本語の散文が韻文的なものと折り合いが悪いのは、韻文がもともと持っていた歌謡の呪術が、散文の客観的・論理的な性質に反するからである
- ⑤ 表面的な通俗性にとらわれずに常に新しい表現方法を追求し続けることで、従来の文学的な型を打ち破り、時代を超えた普遍性のある表現を獲得できるはずである

問七 空欄B、Dに入る語の組み合わせとして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① B 韻文 C 韻文 D 韻文
- ② B 散文 C 散文 D 散文
- ③ B 韻文 C 散文 D 散文
- ④ B 散文 C 韻文 D 韻文
- ⑤ B 韻文 C 韻文 D 散文
- ⑥ B 散文 C 散文 D 韻文

問八 傍線部分(6)「明治の言文一致運動」とあるが、小説の文体として初めて口語文を採用した作品を書いた作家の名前を一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 坪内逍遙
- ② 二葉亭四迷
- ③ 尾崎紅葉
- ④ 国木田独歩
- ⑤ 樋口一葉

問九 傍線部分(7)「日本の近代小説は風土の貧しさからの脱出の一直線上にあり、その行き止まりのあたりに私小説がある」とあるが、ここで筆者が示す「日本の近代小説」の様相を説明したものととして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 韻文的な美意識から独立しようとした試みが、最終的に表現の幅を狭め、自己閉塞的な世界を描く私小説を生み出した
- ② 小説家が社会の急激な変化や風俗の混乱に対応できず、個人的な内面を描く私小説に逃げ込まざるを得なくなった
- ③ 自国の風土や文化の内面的な貧しさや陰湿さを赤裸々に描こうとした結果、自己告白的な私小説を確立するに至った
- ④ 小説家たちが通俗的なテーマを排し、自身の言葉で真実を描こうとした結果、私小説という究極の文学形式を完成させた
- ⑤ 伝統からの脱却を目指し通俗を排除していくなかで、私小説のような人間の情念を繊細に描写する文学に行きついた

問五 空欄A、Eに入る語句の組み合わせとして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① A にもかかわらず E あたかも
- ② A そのわりに E むしろ
- ③ A それどころか E まさに
- ④ A なおかつ E 一方では
- ⑤ A それゆえに E なかんずく

問六 傍線部分(5)「韻文の亡霊の祟り」とはどのようなことか。その説明として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。

解答番号は 。

- ① 散文表現において古い時代の韻文のような定型的なリズムを恣意的に用いることで、文章が古臭く感じられること
- ② 文学作品が持つ情念的な力や歌謡的な響きが、理屈を超えて感情に強く訴えかけ、読者の心を捉えて離さないこと
- ③ 日本の伝統的な感性や美意識が近代化を経てもなお根強く残り、現代の文学作品に否定的な影響を与えていること
- ④ 近代文学が散文に傾倒してもなお韻文のリズムや美意識が意図せず残り、現在の表現に影響を与え続けていること
- ⑤ かつて流行した韻文の形式にとらわれ続け、新しい表現を生み出せず、作品が型にはまったマンネリズムに陥ること

問二 傍線部分(1)「文学的通俗性に《墮》す」を説明したものととして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は  。

- ① 大衆に迎合するために定型的な表現を安易に用いることで、文学としての質を低下させること
- ② 対象となる現実の俗っぽさに引きずられ、表現全体が低俗で品のないものになってしまうこと
- ③ 通俗性を避けて知的優越を保とうとするがゆえに、作品が類型的表現に陥ってしまうこと
- ④ 知的優越を保ちつつ俗と関わる作者の態度が偽善的であると見なされ、作品の評価が下がること
- ⑤ 作者自身の生理的な嫌悪が過度に反映され、普遍的な共感を得られない表現になること

問三 傍線部分(2)「擁護」、(4)「陳腐」と反対の意味を持つ語として、最も適当なものをそれぞれ一つ選び、マークしなさい。解答番号は(2) 、(4) 。

- (2) 擁護 ① 違背 ② 抑圧 ③ 示威 ④ 疎外 ⑤ 侵害
- (4) 陳腐 ① 改革 ② 斬新 ③ 勃興 ④ 躍進 ⑤ 反骨

問四 傍線部分(3)「具眼の士」の本文中の意味として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は  。

- ① 作品の歴史的な位置づけや大衆の求めるものを正確に判断できる、深い知識を持った専門家
- ② 表面的な表現に対し、個人的な好悪の感情に基づいて作品の価値を一方的に判断する評論家
- ③ 確立された伝統や規範を絶対視し、そこから外れる表現を通俗であると排除する知識人
- ④ 作品の創造性の有無を見抜くことができる、優れた見識と洞察力のある批評家や読者
- ⑤ 作品に秘められた作者の真摯な姿勢や普遍的な人間の情念を読み取り共感できる人々

問一 傍線部分(ア)～(ウ)と同じ漢字が使われているものをそれぞれ一つ選び、マークしなさい。解答番号は(ア) 、

(イ) 、(ウ) 。

(ア) フンガイ ① 事実をフンシヨクして述べる

② フンゼンとして口をきかない

③ 部員のフンキをうながす

④ 市民の不満がフンシユツする

⑤ 帝国のナイフンを鎮める

(イ) カンテツ ① 遅れた作業をトツカンで仕上げる

② 大きな計画をカンスイする

③ 学説のコンカンとなる論文

④ 授業のイツカンで奉仕活動をする

⑤ 税金を納税者にカンゲンする

(ウ) ヒゾク ① ヒドウな行為を許さない

② ヒシャタイに焦点を合わせる

③ 時間をロウヒする

④ ヒキンな例で説明する

⑤ 大臣がヒメンされる

の文章の通俗味を感じ分けるところまで語学の修業を積んだ者ではないので、自信はもてないが……)。要するに、散文が一般に韻文の呪力にたいして警戒するという以上に、日本語の散文は韻文的なものと折り合いが悪いのだ。

E 肉親や実家や故郷の土地と、つまり自分の《お里》とほとんどもう生理的に折り合いが悪いように——。明治の言文一

致運動はひとつの出奔、遁走でもあったのではないか。江戸期からの文化は明治の知識人にとって伝統というよりも、まず貧しくて陰湿な風土として感じられたのではないか。すくなくとも自国の文芸の歌謡的なものは、西洋文化の構築的な音楽に触れた耳には、やりきれないほど《俗》と聞こえたにちがいない。西洋文化の壁に押しもどされて、おのれの風土の貧しさに驚きながら、江戸時代の中に文化を見出そうとした文人でも、言語の風土を文章の中に頑固に保持しようとはしなかったようだ。

(7) 日本の近代小説は風土の貧しさからの脱出の一直線上にあり、その行き止まりのあたりに私小説があるように、わたしには思える。私小説は表現の通俗の排除がもつとも手答え確かにおこなわれ得る文学の場として、通俗を嫌悪する精神がおのずとそちらへ導かれた、とわたしは見る。

このような拒絶反応がいまままでのところは日本の小説に、人間の情念の描出をめぐって繊細な工夫をさまざまにもたらした。しかしその工夫もそのつど一回限りのはずのものであり、手法として固定されれば、それはそれでまた通俗と感じられる定めにある。つまり、通俗性ともうひとつの通俗性との微妙な《あわい》<sup>(注4)</sup>に、小説の場があるという趣きなのだ。これは通俗的なものとのあわいが濃やかなまじわりとも言えるかもしれない。

(古井由吉「通俗ということ」問題作成上、一部を改変した)

(注1) 風俗小説 その時期において特徴的な生活文化の特性や社会現象をとらえて描いた小説

(注2) 通俗小説 芸術性の高い純文学に対し、世間一般の人が楽しめるように、娯楽性に重点を置いた小説

(注3) マンネリズム 同じパターンが繰り返され、独創性や新鮮さを失うこと

(注4) あわい さまざまな対象の間の、白黒はつきりしない曖昧な部分や余白などを表す

い、そのつど一回限りのもの、のごとく見なされる。そしてこの独自の釣り合いが反復可能な型のものにしかけて、すこしでも様式化しかかると、たちまちマンネリズムの誇りを具眼の士から受けるわけだが、この批判の底には、よく感じ分けると、通俗の兆しにたいする拒否反応が潜んでいる。それはどこか偽善にたいする道義のフンガイに似ているのだ。

それでは、それは根が倫理的な反俗だろうか。《俗》にたいして、何らかの《聖》が踏まえられているだろうか。すくなくとも《雅》が踏まえられているだろうか。そのどちらかが体得されているのだろうか。すくなくともそれへの信仰なり希求なりが純粹に保たれているのだろうか。あるいは、社会体制の特性を隅々まで拒む、その汚染をおのれの表現においてすこしも許さない、否定の精神の<sup>(4)</sup>カンテツがあるのだろうか。

そのような拒絶ではなくて、もつと生理的な嫌悪、近親嫌悪あるいは自分の生い立ちにたいする嫌悪に似たものがそこにはたらいっている、とわたしは考える者である。かりにここで或る文章が通俗的と感じられたとする。個々の欠点がまず指摘される。<sup>(4)</sup>陳腐な言いまわしだとか、<sup>(5)</sup>手垢に汚れた比喩だとか、類型的修辭法だとか、<sup>(7)</sup>ヒゾクな情念をべとつかせる無神経さだとか……。これらの欠点をかりに消去したとする。あるいはもともとそういう欠点が見当たらない文章だとする。A 通俗の感じが濃く漂う

場合がある。通俗味をきびしく拒むふうな作品の中にもそんな文章がかならず何箇所か、しかも多くはクライマックスに差しかかるところに見られる。神経繊細な作者が自分で<sup>(5)</sup>狼狽したり苦い顔をしたりしているのが、感じられる。

この通俗の感じの正体は何だろう。<sup>(5)</sup>韻文の亡霊の崇り、ではないかとわたしは考えている。死んだはずの韻文が散文の背中に取り憑いて、歌謡の呪術をかけるのだ。それは、物の言い方にかなり羞恥心の強いはずの人間が興奮して無意識のうちに五七調、五五調、七七調で掻き口説くがごとくに喋っているのに似ていないでもない。しかしなぜそれが《通俗的》と感じられるのだろう。

現代の人間の精神構造がいずれ散文認識的になっていて、B の力で他人の認識をさらっていくことも、C の力に踏みこまれて説得させられてしまうことも、本能的に忌む、ということと言える。しかし欧米の言葉を見ると、わたしの知るかぎりでは、韻文と散文とに同質の論理の厳しさを見るといふ態度ははっきりとあり、D といえどもその音楽的な構造を認識の骨組みとしてしっかり保っている。すくなくとも韻文の呪力が通俗と感じられることはないようだ（もつとも、わたしは外国語

### 三次の文章を読み、後の問に答えなさい。

通俗ということがなぜ悪い、という反論がある。《純》文学というものの歴史、およびその規範みたいなものにたいする反論である。正面切ったのもあれば斜に構えたのもあり、居直り空惚とぼけもあれば嘆息に近いものもある。先人の純文学のお手本を押しいただきながら作品自体が見事な反論になってしまっている不言実行型もある。

たとえば風俗小説(注1)というものは通俗小説(注2)ではないのか、という異論もあるところだ。かりに通俗に《墮》してはならないとしたところで、現代の文学からますます失われていく風俗描出を取りもどそうと志す小説が、通俗性とのかかり合いなしに済まされるものだろうか。表現の対象としての通俗性だ、という考え方はある。しかし人の暮くらしの風俗そのものほもとともと通俗的でも何でもない。通俗性は人の観念および表現の類型の中にある。この類型はしかもそれ自体の生命をもっていて、生活風俗の骨子のようなものであり、風俗をいきいきと描こうとするならば、これがまず表されなくてはならない。つまり表現の対象である。だが、はたして対象化しおおせるものだろうか。小説は通俗的な観念と表現に、それといわば共振れを起こすところまでにじり寄らなくては世態風俗は表わせないのでないか。俗とのわたり合いが知的優越をたのみにおこなわれるならば、それはそれだ(1)また文学的通俗性に《墮》すおそれが強くはないか。風俗の描出を志す小説はむしろ通俗小説になる覚悟を決めてかかったほうがよくはないか。

しかしこのような反論異論も、通俗性を擁護(2)するように見えて最後には反通俗の通俗性を撃つ——結局はおのれの反通俗の一段とピュアーな主張におわるのが大方のようだ。われわれの日本近代文学は通俗を忌み恐れる心に、じつに雁字搦がしがらめになっている。江戸時代の文人たちの反俗などということをつい連想させられてしまいが、それとこれとは同一にできない、同じ流れとも思えない。文人たちは反俗ということを生活の態度として通そうとはしても、おそらく、表現から通俗を締め出す、通俗に支えられずに表現が成り立つ、などということは思いも及ばなかったのではないだろうか。それにひきかえ近代の《純》文学においては、たとえば文章の推敲すいこうということひとつ取っても、まず第一に通俗の検閲ではないか。文学はあたかも類型から自由な、反復の許されな

問九 この本文には次の一文が欠落している。本文中の【Ⅰ】～【Ⅴ】のどの箇所に補えばよいか。最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

だが私たちの多くはそれをハッキリとは意識していない。

- ① 【Ⅰ】 ② 【Ⅱ】 ③ 【Ⅲ】 ④ 【Ⅳ】 ⑤ 【Ⅴ】

問十 本文の内容に合致するものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① AIを人間のライバルとみなすような話は、「お化け話」と同じなので、本当は誰一人として信じていないと言える
- ② 人間の際限のない欲望の現実的な姿である生成AIは、人間の「タナトス」を原動力とした「作品」であると言える
- ③ アンチエイジングの市場は、若く元気でいたいという非人間的で不自然な願望を強化・増幅させることで成立している
- ④ 能力がないなら存在する意味がないという価値観の延長線上に、AIによって人間は必要なくなるという発想がある
- ⑤ 人間のテクノロジーとの合体は、人間が能力至上主義の自己理解を脱却することで初めて意義のある成果となりうる

問六 傍線部分(5)「それが多くの人に強い不安を掻き立てた」とあるが、それはなぜだと筆者は述べているか。その理由として、

最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は  20。

- ① 意思疎通ができない障害者は生存する意味がないという考え方が、反論することができないほど正しいものだったから
- ② 保有する能力によって人間は存在を許されるという私たちの価値観と犯人の信念が、根底において同じものだったから
- ③ 私たちが本当は人道などを重視しておらず、能力至上主義の価値観を有しているのだということが明るみになったから
- ④ 犯行が狂人による異常で猟奇的な殺人ではなく、また犯行後に犯人の主義主張や信念が一切変わることもなかったから
- ⑤ 能力のないものは生存する意味がないという「合理的」な考え方が、自分に対しても向けられているように感じたから

問七 空欄Bに入る語として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は  21。

- ① にもかかわらず
- ② すなわち
- ③ しかも
- ④ というのも
- ⑤ それゆえ

問八 傍線部分(6)「『人間 vs. AI』どころか、私たち自身が実はAIだったのだ」とあるが、筆者はここでどのようなことを

述べようとしているのか。その説明として最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は  22。

- ① 仕事をAIに奪われることよりも、AIに奪われるような仕事の遂行能力を重視してきたことが問題だということ
- ② AIが人間に取って代わるのではなく、そもそもAIと人間を別の存在だとみなすことが間違っているということ
- ③ AIによって人類が絶滅させられるというが、それでも人類の価値観や世界観はAIの中で生き続けるということ
- ④ 「人間にしかできない仕事」がAIにとられるというが、それは私たちの無意識における望みと一致するということ
- ⑤ AIと人類の争いを恐れるよりも、人間がこれまで行ってきた仕事のAIによる代行を受け入れるべきだということ

問二 傍線部分(1)「にわか」に、(2)「大時代的な」の意味として、最も適当なものをそれぞれ一つ選び、マークしなさい。解答番号は(1) 、(2) 。

- (1) にわか ① やや ② はるかに ③ 理由もなく ④ 急に ⑤ 徐々に
- (2) 大時代的な ① 時代で異なる ② 時代に合う ③ 時代遅れの ④ 時代を超えた ⑤ 時代に逆らう

問三 傍線部分(3)「人間の欲望の姿」とあるが、生成AIにおいて、それはどのようなものとして現れているか。その説明として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 合理的な推論能力が増幅・拡大され、全体として狂気のレベルにまで達している姿
- ② SF的に空想されてきた機械を超えた、自然言語による対話を行なう主体という姿
- ③ 人間の無意識の中にある死と破壊への衝動が怪物として現実に実体化された姿
- ④ そもそも目的がわからなくなるほどに増幅され加速された知的処理という姿
- ⑤ テクノロジーを便利な道具・手段として扱い、際限なく金儲けを行なおうとする姿

問四 空欄Aに入る語として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 恣意的拡張 ② 自己目的化 ③ 価値中立化 ④ 漸進的消滅 ⑤ 人工知能化

問五 傍線部分(4)「露骨」と反対の意味を持つ語として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 婉曲 えんきよく ② 寛容 ③ 重厚 ④ 慎重 ⑤ 偶然

側からの勝手な見方であって、人工知能の側から見ると、取って代わられるのは人間がそれまでAIと同じようなことしかやってこなかったからである。<sup>6)</sup>「人間 vs. AI」どころか、私たち自身が実はAIだったのだ。

(吉岡洋『AIを美学する』問題作成上、一部を改変した)

(注) フロイト オーストリアの心理学者・精神科医 (一八五六～一九三九)

問一 傍線部分(ア)、(イ)と同じ漢字が使われているものをそれぞれ一つ選び、マークしなさい。解答番号は(ア) 13、

(イ) 14。

(ア) キトク

- ① リンキオウヘンに対処する
- ② 国のキバンとなる産業
- ③ 他の生物にキセイする
- ④ 米価がトウキする
- ⑤ キオウ歴をたずねる

(イ) キユウして

- ① 子どものキユウジョウを訴える
- ② キユウタイイゼンとした組織
- ③ 病状がキユウヘンする
- ④ 失敗をキユウダンする
- ⑤ 経済効果がハキユウする

な理由に基づいて殺害を行なった。意思疎通の能力すら失った人間は安楽死させるべきと考えたからであり、呼びかけて自分の名前が言える人は殺さなかったと言う。この冷静さは、狂気にかられた衝動的虐殺よりも恐ろしい。【IV】犯人はそのことをあらかじめ政府の指導者たちにも予告して承認を求めており、犯行後もまったく信念を変えなかった。

もちろんこんな犯罪は許しがたいと私たちは強く感じるだろう。だが、なぜ意思疎通の能力すら失った人間に生きる意味があるのか、私たちは説明できるだろうか。とにかく人道に反するといつても、人道とは何なのかと聞かれると答えにキウウ<sup>(1)</sup>してしまう。なぜなら私たちは学校でも職場でも、何らかの能力によってその人は存在を許されるという価値観に支配されているからである。それは裏を返せば、能力を喪失した人は存在する意味がないということである。だからといつてももちろん私たちのほとんどはこんな犯罪を実行したりはしないが、根底ではこの犯人と同じ価値観を共有していることになる。【V】人間はモノでも機械でもない、人間の価値は能力だけではないと口では言うだろう。けれども現実には、私たちは人間をモノや機械として扱い、能力を至上価値とする世界に生きているのである。具合が悪くなって病院に行つても、私たちは自分の身体が徹底的にモノとして検査され治療されるのを経験する。鬱病など心の悩みがあつても、それは神経伝達の障害であり薬で改善するよう指導される。つまり人間もまた一つのモノであり機械にすぎないことを、

B 「善意」と合理的な手続きを通じて反論できないような仕方

で、日々条件づけられていのである。人工知能が人間に取って代わることによって、能力の劣った人間がお払い箱になるという「妄想」（としか私には思えない）は、こうした能力至上主義の延長線上に生まれている。

人工知能の普及に伴う希望は、それが「能力」中心の人間観から脱出するきっかけを与えてくれることである。それによって、人間の自己理解は新しい段階に入るのでないかと期待している。時々聞かれる「人間以後<sup>ポストヒューマン</sup>」という言葉は、ふつうは人間がテクノロジーと合体して人間以上の存在に変容すること、つまり機械と融合することで人間がさらなる「能力」を獲得することを意味しているようだ。だがこのイメージには、正直いつてまったく共感できない。私にとってポストヒューマンという言葉が何らかの意味を持つとすれば、それは人間が、近代以降ますます強化されてきた能力至上主義的な人生観・世界観から脱却できるかもしれないという希望にある。これまで人間しかできなかったことが機械に取って代わられるという「危機」が語られるが、それは人間

として読むことができる。それでは人工知能はどうだろうか。人工知能において人間の欲望は、途方もなく増幅され加速された知的処理という姿で出現している。そこでは合理的な推論能力が人間的な尺度を超えてあまりに増幅されているために、そもそもそれが何のための能力であったのか、分からなくなってしまうのである。つまり能力の「A」である。そもそも「能力」とは何だったのだろうか？

AIが脅威であるとされる現実的な理由の一つは、それまで人間が行なってきた仕事を機械が奪うかもしれないという点である。【II】これは産業革命以来、二世紀以上も続いてきた脅威である。これまでも人間は様々な機械を使いながら仕事をしてきたが、そこには「人間にしかできない仕事」の領域が残されていた。だがその領域はしだいに小さくなり、ついに現代の人工知能はこれまで人間にしかできないと思われていた仕事のかなりの部分を代行し始め、しかも桁違いの効率で実行しうることを示しつつある。人工知能はいわば、人間の最後の「キトク権益」<sup>(7)</sup>を脅かしつつあるわけである。たしかにこれは現実的な問題ではあるが、長い目で見れば文明の重要な転換点を暗示しているということもできる。それは他の存在が持たない「能力」の中に人間の存在意義を求めようとする価値観が、土台から揺らぎ始めたということを意味するからである。それによってこれまで、とりわけ産業革命以降、私たちの文明が「能力」中心の人間観をあまりにも当然としすぎてきたことが明らかになりつつある。

能力至上主義は、現代の私たちの日常生活や社会問題の中に露骨に見ることができる。たとえば加齢<sup>(4)</sup>は自然なプロセスであるのに、私たちはそれに逆らい、身体や脳の「能力」をできるかぎり長く維持しようと必死である。アンチエイジングの様々な方法を提供する膨大な市場が生まれているが、それはどうみても、若く元気でいたいという自然な願望を超えて明らかに過剰である。より深刻な社会問題の一例としては、二〇一六年に起こった、神奈川県相模原市における障害者施設殺傷事件をあげることでもできる。事件そのものの衝撃もさることながら、<sup>(5)</sup>それが多くの人に強い不安を掻き立てたことを記憶している方もいるだろう。【III】もしもこれが狂人による異常な猟奇殺人にすぎなかったら、たとえ事件自体は恐るべきものでも、私たちは自分自身の内部にそれほど不穏なものを感じることはなかっただろう。この事件の特異性は、それがまるで私たちの無意識を言い当てているように感じられた点にある。犯人は、自分の名前も言えず応答もできないような障害者には生存する意味がないという、きわめて「合理的」

## 二次の文章を読み、後の問に答えなさい。

人工知能が話題になり始めた一九六〇年代以降、およそ六〇年あまりの歴史がある。だが二〇世紀の間は、それは主として専門的研究者にとつての問題であり、多くの人にとってはSF的な空想の中に登場する存在だった。今世紀に入って初めて、人工知能はにわか(1)に多くの人々にとつて、実際上の関心を集めるようになった。その理由はもちろん、現代の人工知能が示す驚くべき「能力」にある。特に自然言語による対話が可能になったことが大きい。この目覚ましい能力のために、AIが人間を超える、支配する、やがては人類に取って代わる、などといった大時代的な物語がセンサーショナルに語られ、本当らしく思えるようになった。もちろんこうしたお話は、人工物を人間のライバルとみなす根拠のない妄想——フランケンシュタイン・コンプレックス——に基づくものであり、一種の「お化け話」である。だがそのことをいくら説明しても、この種のお話はなかなかなくなることはない。バカげたことだと知っていても、人間はお化け話が好きだからである。【I】だからそうしたお話はよく売れる。しかし厄介なのはお化けではなくて、お化けの影に隠れて金儲け(2)を企(たくら)んでいる人間である。

ここではお化け話ではなく、もう少しマジメに考えてみたい。生成AIの示すこの驚くべき「能力」こそが、私たち人間がそれを通して他ならぬ自分自身と直面し、人間とは何かを新たな仕方で問いかけるきっかけとなっていると、私は考えているのである。このことに関しては、かならずしも現代の生成AIに限られるわけではない。そもそもテクノロジーそれ自体が、人間にとって便利な道具・手段であると同時に、人間の内部に潜む欲望を映し出す鏡のような存在だったのだ。とりわけ現代のテクノロジーは、人間の欲望の姿をかつてないほど増幅・拡大し、それを怪物として実体化するような段階に至っている。核兵器はなぜ存在するのだろうか。合理的には、それは巨大な破壊力を保有し合うことによって戦略的な抑止力を実現するために製造されると言われる。だが美学的な観点からすると、核兵器とはフロイトの言う「タナトス」——無意識の中にある、死と破壊に向かう衝動——に現実的な姿を与える「作品」として現れていると見ることができる。さらに言うなら、装置としての核兵器だけではなく、そもそもそれが運用する核戦略理論が、それ自体はたしかに合理的な推論の帰結でありながら、全体としては狂気へと到達する不条理な「物語」

問九 傍線部分(7)「そうやって生きていくしかないだろう」とあるが、「そうやって生きていく」ために必要なこととして、

不適當なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 感情の波を適切にコントロールすること
- ② 患者の思いに対して過剰に没入しないこと
- ③ 日常から一時的に離れる時間を持つこと
- ④ 患者の生の重みを他者と共に背負うこと
- ⑤ 自身に患者の気配が残りをすることを認識すること

問十 本文の内容に合致するものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 比々野は、蔵原が患者から指名されることで他の看護師より多くの仕事を抱え、困っていることに気づいていた
- ② 治療方針について怖れを抱いていた高田は、自身の人生に寄り添ってくれる蔵原をミーティングに指名した
- ③ 高田は自身と同じ病気で先に亡くなった同室者の気配が消えるのを嫌い、病室を移ることを望まなかった
- ④ 屋上で夕焼けを見ていた蔵原は、うなぎの形の雲に濱岡の気配を重ねながら、物思いにふけていた
- ⑤ 患者の気配について考えていた比々野は、カシコに似た雲を見たことで自身に残るカシコの気配と訣別した

問七 傍線部分(6)「考えたくはない」とあるが、比々野がそう思ったのはなぜか。その説明として、最も適当なものを一つ選び、

マークしなさい。解答番号は 。

- ① 患者の気配が残っていくと、患者との距離を取れず、精神的な負担を際限なく増大させる可能性があるから
- ② 患者の気配が残っていくと、患者の未来のために行動するという自身の理想を実現できないおそれがあるから
- ③ 患者の気配が残っていくと、病院の外でも患者のことが頭から離れず、日常生活に支障が出かねないから
- ④ 患者の気配が残っていくと、亡くなった患者との辛い記憶が蘇<sup>よみがえ</sup>り、そのたびに大きな苦痛を感じるから
- ⑤ 患者の気配が残っていくと、目の前の患者に対して感情移入しすぎて、冷静な医療判断が困難になるから

問八 空欄Bに入る語として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 自嘲
- ② 他意
- ③ 屈託
- ④ 拘泥
- ⑤ 思慮

問五 傍線部分(4)「いや、なんでもない、ちょっと試してみただけ」とあるが、この時の高田がどのような気持ちであったのかを説明したものととして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① その場の思いつきで何気なく口にしてみた自分の発言が、医師には深刻なものと捉えられたのではないかと焦っている
- ② 患者の今しか見えていない医師に、患者の過去やこれからの生への思いを理解してほしいと言いたいが言葉にできずにいる
- ③ 自分の複雑な思いを医師に理解させようと強く主張したが聞き入れてもらえず、無駄だと断念し、怒りを抱えている
- ④ 感傷的になりすぎた自分の発言で、医師から同情されたことを恥ずかしく思い、あわてて話を打ち切ろうとしている
- ⑤ 病に伴う複雑な思いに対して医師の共感を得られなかったのではないかと思い、医師を困らせたくないと気遣っている

問六 傍線部分(5)「気配」は本文で繰り返し用いられているが、どのような意味合いで使われているか。その説明として、最も

適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 患者が去った後も、同室の患者や病棟の看護師たちがその患者のことを思い出す契機となる思い出やエピソード
- ② 患者の人生の痕跡が関わった人々の心身に無意識のうちに残す影響や、医師や看護師が向き合う生の重みの象徴
- ③ 多くの患者の死と向き合う中で、医療従事者が必然的に心に抱えてしまう悲しみや無力感といった個人的な感情
- ④ 以前その部屋を利用していた患者の、病室に染み付いた物理的な存在感や残された遺品などが醸し出す雰囲気
- ⑤ 患者が、自分がこの世を去った後も誰かの記憶に留まりたいと願い、意図的に残そうとした生きた証や思い出

問三 傍線部分(1)「きまり悪そう」、(2)「駄々をこねる」の意味として、最も適当なものをそれぞれ一つ選び、マークしなさい。

解答番号は(1) 、(2) 。

(1) きまり悪そう ① 面目が立たず申し訳なさそう

② 不愉快に感じて苦々しそう

③ 氣勢をそがれて弱々しそう

④ 言葉にしないが不機嫌そう

⑤ 気後れして心許もとなさそう

(2) 駄々をこねる ① 思い通りに従わせようとする

② 規範に背いた行動をとる

③ しつこくわがままを言い張る

④ 場をかき乱して困らせる

⑤ 凶々しい態度で遠慮がない

問四 傍線部分(3)「胸騒ぎがする」のはなぜか。それを説明したものととして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解

答番号は 。

① 蔵原の異変の原因を作った高田に対して、反射的に怒りの感情が向いたから

② 蔵原へ執着していた高田が、蔵原に精神的な負担を与えた可能性を疑ったから

③ 高田が蔵原を執拗じつように指名した時の、高田の常軌を逸した言動を思い出したから

④ 蔵原の行方が分からないうえに、高田の突然の来訪の意図も分からず混乱したから

⑤ 屋上での蔵原の様子気がかりで、高田が悪影響を及ぼさないかと懸念したから

問一 傍線部分(ア)、(イ)と同じ漢字が使われているものをそれぞれ一つ選び、マークしなさい。解答番号は(ア) 、

(イ) 。

(ア) ア|ラ|く

① ソ|ボク|な|雰|囲|気|の|少|年

② 親|戚|と|ソ|エ|ン|に|な|る

③ ソ|ヤ|な|言|葉|を|慎|む

④ 習|作|の|ソ|ゾ|ウ|を|運|ぶ

⑤ 違|法|性|を|ソ|キ|ヤ|ク|す|る

(イ) サ|ツ|カ|ク

① 制|度|の|サ|ツ|シ|ン|を|図|る

② サ|ク|リ|ヤ|ク|を|め|ぐ|ら|す

③ 相|手|の|動|き|を|サ|ツ|チ|す|る

④ よ|り|よ|い|方|法|を|モ|サ|ク|す|る

⑤ 期|待|と|不|安|が|コ|ウ|サ|ク|す|る

問二 空欄Aに入る語句として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

① 気|を|揉|む

② 舵|を取|る

③ 念|を|押|す

④ 釘|を|刺|す

⑤ 世|話|を|焼|く

「いいね、温泉」

ほんとうなら温泉へ、欲をいえばできるだけ人に会わずにすむような場所へ、ひとりで出かけて行ってそこにしばらくとどまりたい。けれども、屋上からの景色を眺めるだけで——夕焼けの中のカシコに手を振っただけで——少し遠くまで出かけたような心持ちになっていることに気づく。

この人も同じだろう。病院がターミナルステーションだとしたら、私たちは人々の流れを整理しつづけなくてはならない。そのために屋上に出る。ここを通過していく人たちの気配をいつまでも抱えていくわけにはいかないと思う。

いろんな人にいろんな生があつて、そこに触れるたびに畏れを感じる。共振しすぎるとよくない、背負わないようにしましょう、と思いつながら、ほんのいつときだけ患者の生を旅してきたようなサツカクに陥ることもある。もうすぐ河口へとたどり着こうとしている生がほとんどだとしても。その気配を、ゆるやかに携え、暴れようとするものは整理をし、<sup>(7)</sup>そうやって生きていくしかないの  
だろう。

夕焼けの雲は川の向こうの空に浮かんでいる。あの空の下でもこの街と同じように人々が生きて暮らしている。川の向こうにも  
このことと同じような総合病院があり、その屋上で私や蔵原さんのような誰かが柵にもたれて空を眺めているかもしれない。

白衣のポケットで院内専用の携帯が鳴る。

「呼ばれちゃった」

携帯を確かめる私を蔵原さんが振り返り、

「よかったですね、夕焼けが終わってからで  
といてって微笑んだ。」

蔵原さんの指したほうを見ると、雲の上の一角にだけ赤みが残っている。

「ほんとか、きれいだなあ」

蔵原さんはもう黙っていた。横顔を盗み見ても、半時ほど前の思い詰めたような表情はどこにもない。そのすがすがしいような顔に、この人は旅立ってしまった人の気配をここで空に返しているんじゃないかと思ってしまった。

「四十九日だったんですって」

「え」

「濱岡はまおかさんの」

ああ、とうなずく。高田さんと同室だった人だ。たしか、うなぎの研究をしていたという穏やかな紳士だった。高田さんより後に来て、高田さんより先に行ってしまった。

「うなぎの形の雲でもあれば、見送るのにうってつけなんですけど」

蔵原さんが明るい声でいう。

見上げた空の片隅に残る、雲の、朱色の中にふと何かが動いたような気がした。

「犬みたい。うなぎじゃないよ、あの雲、犬だよ」

思わず雲に手を振りたくなかった。それは、懐かしい犬の姿をしていた。カシコという、子供の頃に飼っていた犬だ。うんと可愛がっていたのに、ある日の午後遅く夕闇に紛れるように出て行ってそれっきりだ。いくら探しても見つからなかった。日も暮れた頃に幹線道路の脇を急ぎ足で歩いていたのを見かけたという人もいた。名前を呼んだけれど振り返らなかつたから、よく似た犬なのだろうと思っていたけれど、そうか、カシコはいなくなつたのか。それじゃあやっぱりあれはカシコだったのだな、という。あの子は今どうしているだろう。あの夕焼けの雲の上で駆けまわっているだろうか。

「どこか温泉にでも行ってゆつくりしたいですね」

蔵原さんのひとことで我に返る。

それは、わかっている。わかりすぎるほどわかっている。だけど何もいえなかった。患者ひとりひとりの今までや今からを背負うわけにはいかない。そんなことをすれば私たち自身が道に迷ってここへ戻ってこれなくなるだろう。

「いや、なんでもない、ちよつと試みてみたかっただけ」<sup>(4)</sup>

高田さんは、隣の空いたベッドに視線を向けた。つい先日まで、そこにも人がいた。高田さんと同じ病気だったのだけど、駆け足で悪くなっていた。残された高田さんを気遣い、病室を移ったほうがいいのではないかと提案したこともある。高田さんは答えた。

「俺まで部屋を移っちゃったら、この部屋にいたあいつの気配が消えちゃうだろ」<sup>(5)</sup>

気配という言葉が高田さんの口からこぼれたときに、病室の中にゆらゆらと揺れる淡い陽炎のかげろうような存在を私はたしかに感じていた。あれが、「あいつの気配」だったのかもしれない。<sup>(6)</sup> 考えたくはない。彼らの人生を記憶するつもりがなくても、彼らの気配は残っていくんじゃないかということ。病室にというより、たぶん、関わった人々のからだのどこかに。私の中にもだ。どんな形ではわからないけれど。その気配の濃い人を、もしかすると患者は嗅かぎ分ける。自分が去った後にも、自分の気配をどこかにとどめておいてくれるような人を。

それが蔵原さんなのではないだろうか。

鉄の扉を開けると、ひんやりした空気が入り込んできた。コンクリートに足を下ろす。夕闇ゆやみが降りて粒子のアラアくなつた視野に人影があった。柵さくにもたれ、紺くろに近くなつた空を見上げているようだ。近づいていくと、その影が無防備に振り返った。

「あ、比々野先生」

そういつて私に向かい微笑ほほえんだ顔には B が見えない。よかつた、と思う。気配に取り憑よかかっているこの人を想像してしまつたから、とにかくこんなふうに微笑む力があつてよかつたと思う。柵に並び、同じように立って空を見上げる。

「ほら、向こうのほうに、ほんの少しまだ夕焼けが残っているでしょう」

結局、師長が予定通りミーティングに参加し、そこに蔵原さんも同席することで収まった。彼女は終始無言だったが、それでも高田さんは満足そうだった。

そんなことを思い出して、やはり胸騒ぎ<sup>(3)</sup>がする。二十分ほどで回診を終え、ドクターズルームに戻る前にナースステーションに寄った。蔵原さんはいなかった。

「蔵原さん、見かけた？」

その場にいた看護師たちは皆、首を横に振った。まさかまだ屋上から戻っていないということがあるだろうか。

足早に非常階段へ向かいながら、いったい何があったのかと思う。高田さん、わざわざ病棟に現れて何をしていったの。高田さんと蔵原さんの間に何かがあったのかどうかはまだわからないのに、私は高田さんへ怒りの矛先を向ける。

今だよな、といったのは、高田さんだった。患者のことは極力忘れるようにしているから、記憶は断片でしか出てこない。でも、たしかに高田さんだった。屋上へと続く階段を上りながら、そのときの言葉を思い出している。

「今だよな、先生」

そうだ、たしかにそういつていた。退院前、回診で病室をまわったとき、不意に彼が、俺にはわかるよ、といったのだ。

「今が大事なんだ。先生は精いっぱい考えてくれてる。今、目の前の患者にできることは何か、それで頭がいっぱいだ」  
ちようど胸に聴診器を当てているときに喋<sup>しゃべ</sup>られて困った。静かにしてほしかった。

「ほんとにいい先生だと思うよ」

私の困惑した顔を見てか、高田さんとはとってつけたようにそういつた。私は聴診器を耳から外し、どうもありがとうございます、といつた。誉<sup>ほ</sup>めてくれてると思つた。今、目の前の患者にできることを最大限に考える、それは私の理想だった。

そんなでもさ、と彼は笑つた。耳の後ろを搔<sup>か</sup>きながら、続けた。

「今だけじゃないんだ。今まで、とか、今から、とかもさ、あるんだよな、俺たちにも」

一次の文章を読み、後の問に答えなさい。

医師の比々野<sup>ひびの</sup>は、屋上ですれ違った看護師の蔵原<sup>くらはら</sup>が思い詰めた表情をしており、ひどく疲れた様子であったことを気にかけていた。比々野が回診に出ようとしたところ、蔵原が屋上へ行った時分と前後して、先日退院した元患者の高田<sup>たかだ</sup>が病棟を訪れていたことを知った。

うちの病棟の人気ナンバーワンは蔵原さんだという。彼女は検温と問診の巡回時にあちこちで呼びとめられ、ナースコールでは指名され、いつも人より多く仕事を抱えることになってしまつらしい。ちょっと意外だった。たしかに仕事は丁寧だし、まじめで感じのいい人ではあるが、それほどの人気秘密がどこにあるのかはよくわからなかった。

それを聞いて以来、彼女に少し注意を向けるようになった。名指しで彼女を呼ぶ患者を見かければ、やんわりと A。看護師は指名制ではありません、蔵原さんはみんなの蔵原さんですからね。そういうと、たいていの患者はきまり悪そうに笑う。まわりが気をつけてあげないと、蔵原さんという人は指名を受けただけ受けてしまう、そんな印象があった。

ところが、一度、堂々と指名が入ったことがある。リクエストしたのが高田さんだった。ただし、点滴や看護ではなく、今後の治療方針を決める例のミーティングにだった。

「申し訳ないんですが、ミーティングに参加する看護師は師長、あるいはその代理でなければなりません」  
私がそう告げると、

「どうしてよ、俺は蔵原さんに一緒に聞いてほしいんだよ」

まるで駄々<sup>2</sup>をこねる子どもの口調だった。蔵原さんにとっても負担になるだろう。なんといつても彼女はまだ若く、経験が少ない。役に立たないばかりか本人も精神的にダメージを受ける場合がある。そう説得してみたが、高田さんは蔵原さんがいいの一点張りだった。

この頁は白紙です

